整備機器各社、最新商品をPR

3日間で3万8298人が来場

日本最大の自動車機械工具の展示会「第35回オートサービスショー2017」が6月1日から3日間に渡って東京国際展示場で開催された。通路配置などを見直し前回より小間数を拡大して募集した今回は、出展が過去最大の129団体・企業で1078小間となった。また、今年は前回までの動員数や来場者の傾向を踏まえ、学生や平日休が多い整備工場からの来場者数増を狙い、実験的に開催初日を木曜日に変更した。来場者数は速報値で3万8298人となり、前回より1741人増となった。

国産メーカーの品質を訴求

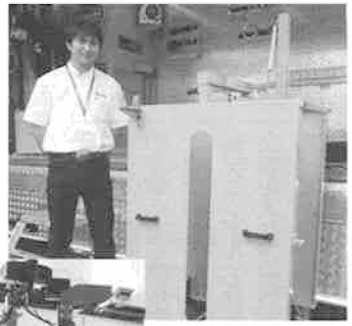
小野谷機工

小野谷機工（福井県越前市、三村健二社長）は、「価値創造の進化～時代に先駆けオンリーワンのものづくり」をテーマに、各種タイヤ整備機器を出展した。

販売促進部の川崎雅彦部長によると、「唯一の国産メーカーとして、お客様の信頼にお応えする品質の高い製品を供給することが務め」とし、〝カスタマーファースト〟を合い言葉に製品を開発。「メイドイン・ジャパンを連想するサクラ色でカラーコーディネートした」というコンセプト機や、ショーに向けて改良を加えたオートサービスショーモデル、さらにこの夏から本格発売を予定する新製品を出展した。

川崎部長

また、準中型免許に対応する車両総重量7・5トン未満のロードサービスカーを出品。現在開発中の新型安全ケージと合わせ実演を行った。



安全ケージ

タイヤチェンジャー

6月1日に行われた「第35回オートサービスショー2017」の開会式で、一般社団法人日本自動車機械工具協会の柳田昌宏

オートサービスショー開会式

柳田会長「未来を切り拓く」

会長は、「自動運転が大きく進歩し、アフターサービスへの期待も高まっている。自動車産業を核として、これからの10年で新しいモビリティ社会が生まれようとしている」とし、大きな変革の時代であることに触れた。その上で「これからどのような変化が起こるのか、そうした変化にどう備えるべきか。さらに新しいビジネスモデルをどのように取り入れていくのか。今回のショーでは、今後のモビリティ社会の核心を担う各企業がさまざまな最新の技術を紹介、提案するステージを準備している。近未来の車社会の発展の一翼を担えるよう、我々の業界が自動車の未来を切り拓くという気概を持って技術革新に取り組んでいきたい」と展示会の意義を語った。

その後、来賓とともにテープカットを行い、盛大な拍手とともに開会が宣言された。